

粘り強く考え、伝え合う”授業の創造

～自ら思考し、課題解決する学習者の育成～

久保寺 悠

篠原 大志

伊東 葵

1. 主題設定の理由

◆現代社会の動向から

平成現代社会は、急速な技術革新とグローバル化の進展により、私たちの生活や働き方、価値観に大きな変化をもたらしている。こうした変化の中で、社会は予測困難で複雑な課題が次々と生じる「VUCA (Volatility : 変動性, Uncertainty : 不確実性, Complexity : 複雑性, Ambiguity : 曖昧性)」の時代に突入している。従来のように、過去の経験や知識だけでは対応しきれない状況が増えており、柔軟な思考力や創造力、そして他者との協働による問題解決能力がますます重要になっている。

このような時代背景の中で、日本が目指す未来社会「Society 5.0」は、AI（人工知能）やIoT（モノのインターネット）などの先端技術を活用し、経済的発展と社会的課題の解決を両立させる、人間中心の社会の実現を構想している。Society 5.0では、技術が人間の生活を支える道具として機能し、誰もがその恩恵を享受できる包摂的な社会を目指している。これにより、教育、医療、福祉、交通など、あらゆる分野での革新が期待されており、個人の可能性を最大限に引き出す環境が整いつつある。

このような未来社会においては、単なる知識の習得にとどまらず、自ら課題を発見し、他者と協力しながら解決に向けて主体的に行動できる「自立した学習者」の育成が不可欠であると考えられる。教育の現場では、受動的な学びから能動的な学びへの転換が求められており、探究的な学習やプロジェクト型学習などを通じて、生徒が自ら考え、試行錯誤しながら学ぶ姿勢を育むことが重要であるとも言われている。

その中でも、英語教育はこうした能力の育成において極めて重要な役割を担っていると考えられる。英語は単なる言語スキルではなく、世界とつながるための手段であり、異なる文化や価値観を理解し、尊重する力を養うための重要なツールである。英語を学ぶことを通じて、批判的思考力や論理的な表現力、コミュニケーション能力が培われるだけでなく、異文化理解力やグローバルな視野も広がる。これらの力は、国際社会で活躍するために不可欠であり、また多様性を尊重する社会の構築にも寄与するであろう。

今後の教育においては、英語を「使える」ようになることに加え、英語を通じて「考える」「伝える」「共感する」力を育てることが求められるであろう。教師は、言語運用能力の向上だけでなく、生徒が自らの意見を持ち、それを他者と共有しながら新たな価値を創造できるような学びの場を提供する必要があると考えられる。英語教育は、まさにこれからの社会を生き抜く力を育むための重要な柱であり、その可能性が広がっていると捉えられる。

Society 5.0の実現に向けては、学習者が自ら学び、考え、行動する力を育む教育への転換が求められ、VUCAの時代においては、正解のない問いに向き合い、柔軟に対応する力が求められると考えている。英語教育においても、教科書の内容を超えた実践的な課題に取り組むことで、学習者の思考力・判断力・表現力を育成する必要がある。英語教育における「自立した学習者」の育成を目指す教育実践とその効果を検証することを目的とする。本研究において、具体的な教育実践とその効果を検証し、さらなる改善を図ることを目指したい。

◆これまでの研究との関連から

H26～28 研究主題

『伝える力』を育む授業の創造

～振り返りを生かす学習過程の工夫～

『『伝える力』を育む授業の創造について、「自分が表現したものを振り返ること」や「よりよい表現を模索すること」の2点から迫った。他者との交流を意図的に仕組み、深く考える授業実践を重ねたことで、①活用できる言語知識の増加、②言語機能に対しての意識向上、③相手意識の高揚が成果として挙げられた。「深く考える」授業を繰り返し行っていくことで、生徒は自分の表現したものを深い思考を通して改善しようとするようになり、「振り返り」を生かした学習過程を工夫することが『伝える力』を育む授業を創ることにつながるということが明らかになった。そうした教師が意図的に仕組んだ授業やその学習過程においては、既習知識を基盤として伝達効果を考えながら自己の表現の質を考える等、本校英語科が期待する生徒の姿が見られた。しかし一方で、生徒自らが言語知識を増やそうとしたり、言いたいことと言えことのギャップを感じたときに、もっている知識を活用して伝えようとしたりする姿勢に課題があると考えられた。

H29～R 1 研究主題

『伝える力』を育む授業の創造 ～対話的な学習活動の工夫～

「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方」を働かせた学びを通して『伝える力』を育み、それを見取することを主たるねらいとし、対話的な学習活動を工夫することが効果的に資質・能力を育成することにつながるという仮説のもとに研究を進めた。『伝える力』を育む上で、「見方・考え方」を働かせた深い学びは必要不可欠であり、対話的な学習活動を充実させることが、生徒の深い思考を促し、質の高いアウトプットにつながるということが明らかとなった。指導者が、評価は指導の一環であるという認識をもち、評価を指導計画の中に位置づけて適時組み込むことで、評価を指導に生かすことが可能となり、「指導と評価の一体化」は具現化されることも示された。

R 2～R 3 研究主題

『伝える力』を育む授業の創造 ～主体性を促す対話的な学習活動の工夫～

前年度までの研究を継続、発展させ、生徒の「主体的な学び」を実現する指導の在り方について迫った。生徒の「主体性」を促すためには、「対話的な学習活動」を充実させ、教師の適切なフィードバックや『「主体的な学び」のプロセスモデル』を意図的に単元計画や一単位時間内に位置付けて授業実践することが有効であることが明らかになった。また、ICTの活用が学習指導の幅を広げ、多様化する生徒のニーズに応える授業実現の可能性を見出すことができた。

R 4～R 6 研究主題

『伝える力』を育む授業の創造 ～主体性を促す指導の工夫～

前年度までの研究を継続、発展させ、「『主体的な学び』のプロセスモデル」と「創造性」の2つをキーワードに据え、生徒自身によるプロセスモデルの実践と、思考力、判断力、表現力を高めるための手立てについて研究を行った。単元末パフォーマンス課題を工夫して設定し、それを学習者に明示することにより、いくつかの成果が上がった。1つ目、学習者の主体性が高まった。2つ目、単元末パフォーマンス課題及び、そこに至るまでの言語活動や単元計画を共有することにより、学習者がより単元のゴールを意識しやすくなった。3つ目、2つ目に関連して、指導者も単元のゴールに向けて生徒が言語活動における言語面・内容面をブラッシュアップしている様子を見とることができた。

◆生徒の実態から

本校の生徒たちは、語彙力や表現力に関して、多くの知識を有しており、英語学習において基盤となる言語的理解力があるといえる。授業への取り組み姿勢も前向きであり、真剣かつ誠実に学習活動に参加する姿が日常的に見受けられる。また、多様な話題に対する興味関心を持つ生徒が多く、英語を通じて文化や社会、科学など、幅広い分野への探究心を育てている点も特徴の一つである。

その一方で、自らの知識を積極的に発信したいという意欲を持ちつつも、誤答や失敗に対する不安から、発言や表現に躊躇する傾向も見られる。また、既習事項を新出事項と結びつけて活用できることが難しい。これは、心理的な安全性や失敗を許容する学習環境の整備が、今後の指導において重要であることを示している。また、授業時間以外での自主的な英語学習には消極的であり、学習活動が教室内にとどまりがちである点も課題といえる。加えて、自分たちが直面する可能性のある社会的・個人的課題についての問題意識が希薄で、学習を現実の生活と結びつけて捉える力の育成が求められている。

これらの実態を踏まえ、本校英語科では、言語活動を通じて課題解決に取り組む力を育むことを、柱の一つとした。学習者が実際のやり取りの中で、思考・判断・表現といった内容面を意識しながら言語を活用し、目的に応じた適切なコミュニケーションを図ることができるよう指導を行いたい。単なる知識の習得にとどまらず、言語を使って自ら課題を見出し、他者と協働しながら解決に向かう力を育てることが重要であると考えます。

また、課題解決の過程において、自分の考えや意見を論理的かつ主体的に表現できる力の育成にも力を入れたい。他者の意見を尊重しつつ、自分の立場を明確にし、根拠をもって伝える力は、これからの社会を生きる上で不可欠な資質である。さらに、直面した場面や状況に応じて、これまでに学んだ知識や技能を柔軟に活用できるようになることも、学習者の成長にとって重要な要素であると考えます。

生徒の知識を活かした積極的な言語活動の場の提供、安心して失敗できる環境づくり、そして教室外でも主体的に学ぶ姿勢の育成が、今後の指導において重視されるべきである。また、日常生活との接点を意識した課題設定を通して、生徒が自らの立場で課題を発見し、考える力を身につけることが、より深い学びに繋がると考えられる。

2. 研究の目的

英語教育における「自立した学習者」の育成を目指す実践とその効果の検証を目的とする。具体的には、主体的・対話的で深い学びを促進する授業の設計、ICTを活用した学習支援の可能性、学習者の自己調整学習能力の育成などに焦点を当て、研究を進めていく。

3. 研究内容（全体研究との関わり）

令和7年度から本校の全体研究では、「自ら学びを深める生徒の育成～自立した学習者を育むための授業の創造～」という研究主題を掲げ、今年度は3年計画の1年目にあたる。

他者との関りの中で、自立した学習者を育むことを目指し、研究を行っていく。具体的には、学習の場面において、生徒自身が「自己選択・自己決定」を行う場面を教師が設定することで、生徒の意欲の高まりにつなげたり、課題解決に進んで向かうことにつなげたりできるようにしていきたい。

そこで、本校英語科においては、以下のことに重点を置き、研究を進めていきたい。

- (1) 思考力・判断力・表現力を用いて、課題解決ができる学習者の育成
- (2) 課題解決するために、自分の考えや意見等を表現できる学習者の育成
- (3) 直面した場面や状況に応じて、既習事項を活用することができる学習者の育成

(1) 思考力・判断力・表現力を用いて、課題解決ができる学習者の育成について

現代の英語教育において、単なる語彙や文法の習得にとどまらず、学習者が自らの思考力・判断力・表現力を活用し、実社会における課題に対して主体的に取り組む力を育むことが求められている。平成26年に文部科学省が発表した「今後の英語教育の改善・充実方策について 報告～グローバル化に対応した英語教育改革の五つの提言～」では、“グローバル化の進展の中での英語力の重要性”として、「基礎的・基本的な知識・技能とそれらを活用して主体的に課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等を育成することは、児童生徒の将来的な可能性の広がりのために欠かせない。」と述べられている。また、中央教育審議会答申「令和の日本型学校教育の構築を目指して」の中でも、課題解決能力や論理的思考力の育成が、英語を含む教科横断的な学習の中で重要視されていることがわかる。こうした力は、グローバル化が進む現代社会において、異なる文化や価値観を持つ人々との協働や対話を可能にする基盤となるものであり、英語を「使える力」として身につけるためには不可欠であると考え。本研究では、英語教育を通じて、学習者が自ら課題を発見し、情報を収集・分析しながら、適切な判断を下し、論理的かつ創造的に表現する力を育成するための指導方法や教材の開発を目指したい。例えば、実際の社会的なテーマを扱うことで、学習者が英語を通じて自らの考えを深め、他者と共有し、協働して課題を解決する経験を積むことができるような活動を取り入れるなどしたい。そのような教育実践を通じて、英語を単なるコミュニケーション手段としてではなく、思考を深め、判断を下し、自己を表現するための道具として活用できる学習者の育成を目指したい。

そこで、本英語科では、「思考力・判断力・表現力を用いて、課題解決ができる学習者」を次のように捉える。

場面や状況をできる限りの確に捉え、自ら課題点を見つけ、目的の達成や課題解決のために、何をすべきかを考えたり、相手の置かれている立場や状況を考えたりしながら、英語を活用できる学習者。

(2) 課題解決するために、自分の考えや意見等を表現できる学習者の育成について

中学校学習指導要領外国語編の「話すこと（やり取り）」の目標として、「日常的な話題や社会的な話題に関して、自分の考えたことや感じたこと、その理由などを即興で述べ合うことができるようにする」という内容があり、「即興で伝え合う」とは、事前準備なしで、相手と事実や意見、気持ちなどを伝え合うことと定義されている。また、「英語教育改善のための英語力調査事業（平成27年度）報告書」では、「与えられた課題について、自分の意見や立場を話したり書いたりする活動を経験している生徒が少ない」ということが課題として挙げられており、「話すこと」や「書くこと」などを通じて主体的に互いの考えや気持ちを英語で伝え合う言語活動を展開する必要性が述べられている。

外国から日本に来る人々は増え、日常生活の様々な場面で外国人とコミュニケーションを取る機会も今後ますます増えていくことが想定される。当然、その場面や状況も様々であるだろう。その中で、相手から自分の考えや意見を求められる場面も出てくるであろう。例えば、飲食店の行列に並んでいるときなどに、外国人からどのメニューを食べるべきか尋ねられた場合は、自分のこれまでの経験則などから、自分の意見や考えを外国人に伝えることができる力が必要であるといえる。

本校英語科では、「課題解決するために、自分の考えや意見等を表現できる学習者」を以下のように捉える。

目的の達成や課題を解決するために、自分の意見や考えがその場に必要であると判断したり、相手から意見や考えを求められたりした場合、多少の誤りはあったとしても、持ち得る知識・技能を活用し、自身の経験則なども踏まえながら、自分の考えや意見を英語で相手に伝えることができる学習者。

(3) 直面した場面や状況に応じて、既習事項を活用することができる学習者の育成について

既習事項をいかに有効的に活用できるかということについては、令和2年度～令和4年度まで本校で行ってきた研究の内容の一部であったが、この点についても、引き続き研究内容の一つとして進めていきたい。

生徒の実態の部分にも記したように、本校生徒は、誤答や失敗に対する不安から、発言や表現に躊躇する傾向が見られたり、既習事項を新出事項と結びつけて活用できなかったりする傾向にある。日頃の授業実践においては、教師側が使える、あるいは使うべき既習事項をイメージできているのだが、生徒がなかなかそれを使用できず、もったいないと感じることも少なくない。直面した場面において、英語を使用して対応する際、既習事項の中のどの内容を使用して対応できるのか、イメージをしたり、自然なかたちで既習事項を活用できたりすることが理想的だと考える。また、新出事項を学習する際は、新出事項と既習事項を結び付けて学ぶことができることも重要だと考える。既習の表現が下地として存在し、そこに新出表現を重ねて（併せて）、他者に対して表現することができるような指導を行いたい。

本校英語科としては、「直面した場面や状況に応じて、既習事項を活用することができる学習者」を次のように捉える。

場面や状況に応じて、目的の達成や課題を解決する道筋を考えながら、適切な語句や表現を選択し、活用することができる学習者。

以上(1)～(3)の内容を実践していくこと、つまり(1)～(3)のような学習者を育成していくことが、本校全体研究の主題にもある「自立した学習者を育む」ことであると考え、本校英語科では、研究主題を「**“粘り強く考え、伝え合う” 授業の創造**」、副題として「**～自ら思考し、課題解決する学習者の育成～**」と設定した。

ここでいう、「粘り強く考え」ということは、一つは、どのような表現をしたらよいか悩んだとしても、教科書やワークシート等、これまで学習に使用してきた教材を使用したり、教室で仲間と伝え合う活動を行う中で、仲間の使用していた表現を参考にしたり真似たりしながら何とか表現したりすることであると考え。他にも、自分の考えや意見を、論理的に、つまり、理由を添えたり、例を挙げたり、話す順番や、相手に伝わるかどうかを意識したりしながら伝えることや、本校生徒の実態から見て、文法や語彙の誤りを恐れずに挑戦し続ける姿などが、「粘り強く考え」ということにあたると考える。

本校英語科では、“粘り強く考え、伝え合う”姿を次のように捉える。

既習事項や、協働する仲間とのやり取りの中で得たものを使用し、事実や自分の考えや意見を論理的に且つ、誤りを恐れずに伝え続ける姿。

4 研究仮説

「**“粘り強く考え、伝え合う”**」ことにより、**自ら思考し、課題を解決し、学びを深めることができる**だろう。

英語科での研究の最終目標は、やはり、本校全体研究のテーマにもある、「自ら学びを深める」ということである。では、英語科で捉える「学びの深まり」とは、具体的にどのようなことか、定義しておきたい。

このことは、前述の、「粘り強く考える」ということと、内容が重なる部分もあるかと思うが、目標に向かったときに、そこへ向けての道筋をイメージし、他者とのやり取り（意見交流も含む）の中で、自らの表現に変化を生じさせたり、表現方法が増加したりしながら、課題を解決できることや、課題解決後は、次の課題を設定することが学びの深まりといえるのではないか。ここでいう他者とのやり取りの中には、学習者同士もちろん含まれるが、学習者と教師とのやり取りも含まれる。学習活動の中で、教師からのアシストや、学習者同士のやり取り等の中での気づきから、発見があり、次の表現活動において、それらを使えるようになることが、学びが深まったといえるのだと考える。そこには、目的・場面・状況の設定が大きく関係しているといえる。例えば、好きな食べ物を相手に表現する場合、ただ表現することに対して、学習者のモチベーションは上がることはないだろう。「日本のことをよく知らないALTに対して、日本の食べ物を知ってもらうきっかけ作りのために、自分の好きな日本食を表現する」といったように、そこに目的・場面・状況があって初めて「表現したい」「表現しよう」と思うことができる。そして、そこに

は、いわゆるループリックのような規準も必要であると考え。学習者の学習の深まりを、教師が見取ったり、学習者自身が学びが深まったかどうかを見取ったりするためである。また、学習者によって自ら学びを深められる者もいるが、共に学習する者や教師からの声かけや気付けが必要な学習者もいることを踏まえておく必要もある。その際、難しい表現を無理に使用しようとするのではなく、言い換えなどによって表現できなかったことが表現できるようになることも、学びを深めることになるという考えも持っておきたい。

以上を踏まえ、本校英語科では、「学びを深める」ということを次のように捉える。

場面や状況等を踏まえ、他者とやり取りをした結果、自らの表現方法や表現の種類が増加したり、表現できないことに対して、習得した別の表現で言い換えたりしながら目的を達成できること。また、目的達成後に次の目標をイメージしたり、設定したりできること。

5 研究を支える「粘り強く考え、伝え合う」取り組みとして

○目的・場面・状況に応じた、自分の考えを述べる活動

コミュニケーションをする目的・場面・状況をより明確にし、どのようにすればより相手に伝わるかということを考えつつ、自分の考えや意見などを、自身の経験則なども踏まえながら相手に伝えることができるような活動を取り入れていく。また、単元を見通したり、単元の目標を何度も振り返る機会を作ったりして、学習者自身が、今何を学んでいて、どのような学びを深められればいいのかを確認できる環境を整えることも必要であると考え。

○問いによる授業作りと領域の統合

授業のベースになるのは、やはり教科書である。そのため、学習者が教科書の内容をいかに身近に感じることができるか、あるいは、いかに自分事に感じることができるかというところがポイントとなってくるだろう。教科書の内容に迫るためには、内容に関する問いを学習者に投げかける必要があると考える。また、4技能5領域の統合も表現の幅を保ったり広げたりするために必要となってくる。話したことを書いたり、読んだことについて、自分の考えを表現したりするなどの取り組みを実践していきたい。

○学びが深まったかどうかを見取ることができる工夫

ロイロノートフォースクールやGoogle フォーム、スプレッドシート等のICTを活用したり、振り返りシートをより有効的なものへとブラッシュアップさせたりするなど、学習者の学びが深まったかどうかの変容を見取ることができる仕組み作りをしていきたい。

6 参考文献

- 文部科学省 グローバル化に対応した英語教育改革実施計画（平成25年）
- 文部科学省 今後の英語教育の改善・充実方策について 報告 ～グローバル化に対応した英語教育改革の五つの提言～（平成26年）
- 文部科学省中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（中教審第197号）」（平成28年）
- 山梨大学教育人間科学部附属中学校 研究紀要（平成23～27年度）
- 文部科学省 中学校学習指導要領 外国語編（平成29年）
- 文部科学省 中学校学習指導要領解説 外国語編（平成29年）
- 山梨大学教育学部附属中学校 研究紀要（平成28年度・令和3年度）
- 山梨大学教育学部附属中学校 研究紀要（令和4年度・令和6年度）